

女性医療における漢方薬の有用性

医療法人社団愛育会福田病院 院長
河上 祥一 先生

1991年 琉球大学医学部医学科 卒業
同 年 熊本大学医学部付属病院産科婦人科 研修医
1992年 九州厚生年金病院産科婦人科 研修医
1993年 熊本大学産科婦人科 大学院
1997年 水俣市立総合医療センター産婦人科 副医局長
1998年 飯塚病院産婦人科 医局長代理
2000年 医療法人社団愛育会福田病院
2006年 同病院 院長



熊本市にある福田病院は周産期医療の専門病院で、年間総出産数は3,000例を超え、一施設としては日本一である。さらに、女性のライフステージである誕生から思春期、妊娠出産を迎える成熟期、更年期さらには老年期に至るまでの女性のすべての健康を守り、その生涯を支援しサポートするウーマンホスピタルでもある。院内は快適な設備が整い、10階屋上庭園からは熊本城の全容を眼下にみることができる。

今回は、同病院の河上祥一院長をたずね、女性医療における漢方薬の有用性についてうかがった。

輝かしい沿革を誇る福田病院

当院の歴史は古く、明治40年にまでさかのぼります。創立者である福田令寿は、熊本英学校を卒業後、英国に自費留学し、女性の地位向上のために産婦人科医療を学びました。帰国後、熊本市内に病院を開設するとともに、貧しい女性のための無料の診療所の開設も行いました。

その後も一貫して女性医療に心血を注ぎ、現在では、周産期のみならず生殖内分泌外来、婦人科、東洋医学漢方診療科さらには新生児科を備えた「ウーマンホスピタル」として、地域医療に貢献しています。また、病院の目標としては、大学レベルの高度医療と助産院の温かさを兼ね備えた病院を目指しています。

なかでも周産期医療は、ハイリスク妊娠の管理も行い、妊婦ドッグ検診などのほか、陣痛・分娩・回復まで同じ部屋でリラックスした状態で過ごすことができるLDR (Labor・Delivery・Recovery) 室もいち早く導入しました。そのようなことから、平成18年には周産期医療の基幹病院として、熊本県内で2番目の地域周産期母子医療センターにも認定されました。当院独自の産婦人科専攻医(後期研修医)も全国から採用し、毎年2名の専攻医が豊富な症例数に日々健闘しております。また、当院にて産婦人科専門医の取得も可能です。

河上院長の漢方との出会い

私は、とくに婦人科疾患では漢方薬が有用であることが多いと考えていますが、そのような漢方との出会いには、いくつかのきっかけがありました。

その1つは、派遣先の水俣市立総合医療センターで、

外科部長をされていた、現院長の坂本不出夫先生にお会いできたことです。当時は、産婦人科診療に少しは自信が付いた頃でしたが、西洋医学の限界も同時に感じていました。坂本先生は漢方に大変詳しく、基礎的なことを教えていただき、また薬剤師の協力も得て、つわりの治療のために漢方薬の坐薬を作り使用したところ、とても評判がよかったという経験をしました。

さらにその後、福岡県の飯塚病院にも派遣されました。飯塚病院は、既に九州における漢方診療のメッカであり、漢方の大家である三瀧忠道先生がおられるという幸運に恵まれました。当時は、漢方診療科と産婦人科が同じフロアーにあり、三瀧先生に漢方診療についての直々のご指導をいただくことも度々ありました。このような経験が今の私の診療にも大きな影響を与えていることは言うまでもありません。

福田病院での漢方治療

その後、今の福田病院に勤務するようになってからは、漢方を日常診療に積極的に取り入れることで、幅広い女性医療に対処できることを改めて認識しました。

当院では、私以外にも多くの医師が漢方薬を使用していますが、女性のライフステージのどの場面にあっても、漢方薬はなくてはならないものだと考えています。たとえば、妊娠中の合併症で西洋薬ではできれば飲みたくないというケースや、アトピー性皮膚炎を基礎疾患に持っている患者さんもあります。そのような場合にはやはり漢方薬の有用性を感じます。

漢方薬の処方「証」をみて判断することが基本ですが、私の経験からすれば、妊娠中は体質が非常に狭い範



囲にあると考えられるため、病名処方漢方薬を使用しても高い有用性が期待できます(表)。

漢方薬に詳しくなると、もうひと工夫することでさらに効果を高めることも可能です。

たとえば、更年期障害の漢方治療には、加味逍遙散が定番とされていますが、苓桂朮甘湯、柴胡加竜骨牡蛎湯、桂枝加竜骨牡蛎湯などと組み合わせると、さらにより効果が得られることが多いです。また、加味逍遙散は多様な愁訴がある患者さんには効果的ですが、いきなり加味逍遙散を処方しますと、当初の愁訴が改善されたにもかかわらず次の外来受診時には、また新たな愁訴を訴え、次の処方に苦慮します。したがって、このような多愁訴があり一見几帳面そうな患者さんには、最も気になる症状が何であるかを明確にして、まずその症状の治療のための漢方薬を処方し、加味逍遙散はあくまで最後の「切り札」として使用しますと、患者さんは「この漢方薬が一番自分には合っている」と、大変満足されることが多いです。

表 妊娠中の代表的疾患に対する漢方薬処方の目安

疾患	代表的な漢方薬	
習慣流産・不育症	柴苓湯	
切迫流産・切迫早産	当帰芍薬散 *ウテメリンの副作用防止にも効果的	
妊 娠 悪 阻	小半夏加茯苓湯、半夏厚朴湯、茯苓飲合半夏厚朴湯 *坐薬あるいは注腸投与も有用	
妊娠高血圧症候群	釣藤散	
合併症	貧 血	人參養榮湯、当帰芍薬散
	め ま い	五苓散
	浮 腫	五苓散+当帰芍薬散、防己黄耆湯
	痔 疾	乙字湯+桂枝茯苓丸
便 秘	大黄甘草湯 *桃核承気湯、大柴胡湯などは使用を控える	

自己血貯血における人參養榮湯の有用性

周産期医療では手術などで輸血を必要とするケースがあります。たとえば、前置胎盤や多胎妊娠の場合には、手術に伴う輸血が必要となることが多くあります。

輸血は言うまでもなく自己血が望ましく、ましてや特殊な血液型では、自己血貯血がないと緊急時の対応に苦慮することも稀ではありません。そのため当院では輸血の必要性が考えられるような患者さんには自己血貯血をお勧めしております。

前置胎盤や多胎妊娠では、通常、37週前後で出産しますので、この約5週前から自己血貯血をするようにして

います。ところが、妊婦は貧血であることが多く、十分な自己血貯血が難しいことも少なくありません。そこで当院では、Hbが11g/dLを下回るような貧血症例には人參養榮湯を投与するようにしています。その結果、Hbの改善を認めると同時に必要な貯血(350ccの2パック)が可能になることを多くの症例で確認しています。

患者さんには自己血の安全性を説明することで、ほぼ全例で同意のもとに貯血を行うことができます。さらに当院で使用しています人參養榮湯は1日2回の服用でよいことから、患者さんにとっても服薬の負担が少ないというメリットがあります。その結果、当院では前置胎盤や多胎妊娠の手術でもトラブルを経験することは少なく、その後の経過も良好です。

妊婦さんへのインフルエンザにも漢方

今年は、新型インフルエンザが猛威を奮い、特に妊婦さんが感染すると重症化するという報告もあります。以前より、季節性インフルエンザにも妊婦さんは、重症化することがありますので、まずは、予防やワクチン接種を勧めておりました。タミフルの有効性も周知の通りですが、やはり、妊娠中は控えたいという患者さんもおられます。その時に、麻黄湯などの漢方薬が有効なことが多いです。解熱効果を期待するときは、もちろん、アセトアミノフェン剤との併用も必要ですが、漢方薬1日3回の服用でなく、特に3時間毎がよろしいようです。

漢方を日常臨床に取り入れることのメリット

西洋医学の進歩は著しく治療効果も高いですが、決して万能ではありません。医師として患者さんを目の前にした場合、できるだけ多くの治療の「引き出し」を持つことは、それだけ患者さんの満足度を高めることにつながると確信しています。漢方治療はそのような大切な「引き出し」の一つです。

医師の中には漢方は難解でとっつきにくいと言われる先生もおられますが、まずは一つでもよいので漢方薬を使ってみて、その手ごたえをみながら、次のことを考えればよいのではないのでしょうか。かならず患者さんがその答えを出してくれると思います。